

すべての赤ちゃんをRSウイルスから守る2つの予防法

2025年5月24日

NPO 法人 VPD を知って、子どもを守ろうの会

NPO 法人 VPD を知って、子どもを守ろうの会（理事長 菅谷明則：すがやこどもクリニック院長）は、全国の小児科医等からなる会員とともに、VPD（Vaccine Preventable Disease：ワクチンで防げる病気）やワクチンによる予防の重要性を広く社会に訴えるとともに、すべてのワクチンの定期接種化を推進する活動をしています。

RSウイルスからすべての子どもを守る2つの予防法

RSウイルス感染症は、新生児、乳児が感染すると重症になり入院したり、集中治療（酸素投与や人工呼吸）が必要となったりする呼吸器感染症です。早産児や基礎疾患がある乳幼児は重症化リスクが高いとされていますが、入院した子どもの90%は基礎疾患がなく正期産で生まれたお子さんという報告があります。

WHO ではすべての新生児、乳児を対象にRSウイルス感染症の予防対策を検討し、妊娠中のワクチンや小児の抗体薬を定期接種に組み込んだ欧米諸国からは効果が報告されています。日本でも、昨年5月に基礎疾患があるお子さんだけでなく、基礎疾患のないすべての赤ちゃんを感染から守るための2つの予防法が登場して1年が経っています。

RSウイルス感染症から赤ちゃんを守るために、調査にみる3つの課題

当会では、2025年4月にRSウイルス感染症に関する調査を実施しました。調査結果から、3つの課題が見えてきました。

【調査概要】

- ◆調査日 2025年4月23日～24日
- ◆調査方法 インターネット調査（マクロミル）
- ◆対象 性別：女性 / 年齢：20代～40代 / 居住地：全国

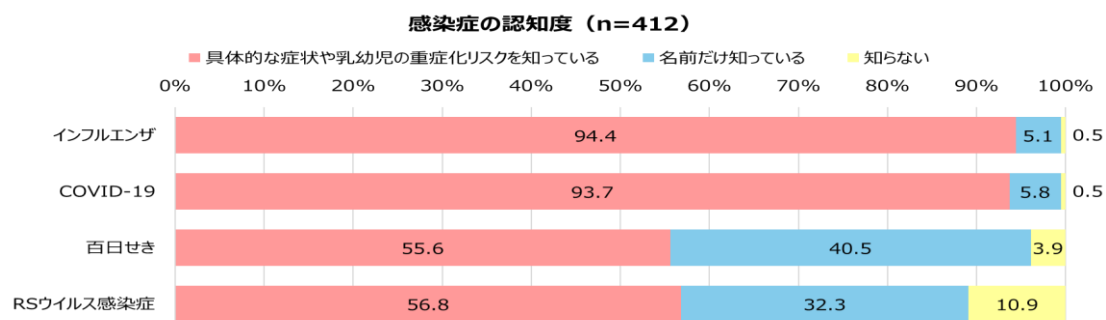
以下の①～④に該当する各103名、計412名

- ① 妊娠中（子どもの有無は不問） ② 末子が生後6か月未満（妊娠中ではない）
- ③ 末子が生後6か月～11か月（妊娠中ではない） ④ 末子が1歳（妊娠中ではない）

課題1 ◆ 出産前にRSウイルス感染症をよく知る人は6割弱。お子さんがいない妊婦さんではさらに少ない

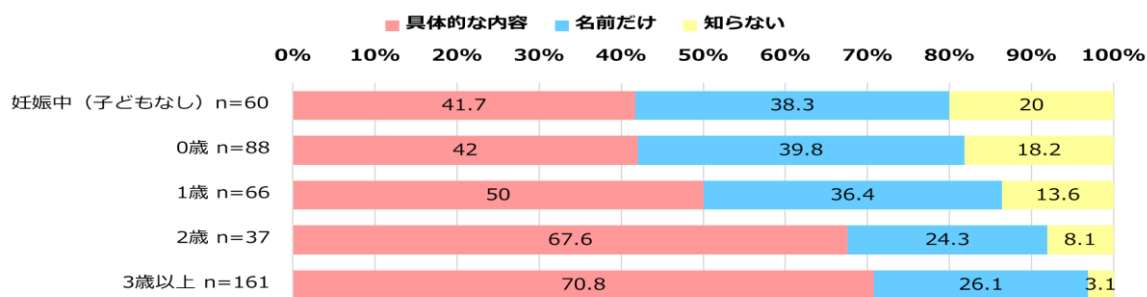
インフルエンザや新型コロナウイルス感染症では、具体的な症状や乳幼児の重症化リスクについて、ほとんどの人が知っています。

一方でRSウイルス感染症の具体的な症状や乳幼児の重症化リスクを知っている人は6割弱にとどまっています。



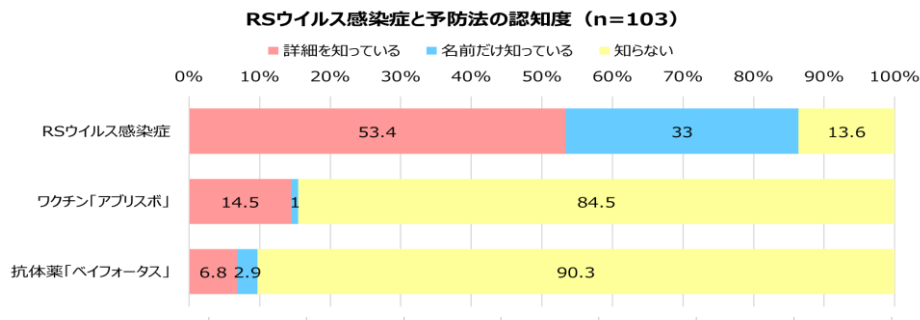
また、長子のお子さんの年齢別にRSウイルスの認知度をみると、子どもの年齢に応じて具体的な症状や乳幼児の重症化リスクを知る人が増えています。実際に子どもや周囲が感染したり、地域での流行情報を耳にしたりするようになるからと推察できます。

長子の年齢別「RSウイルス感染症」の認知度（n=412）



課題2 ◆ 妊婦さんがRSウイルス感染症の予防法を知らない

妊娠中の女性のRSウイルス感染症の認知度は、「病気の詳細（具体的な症状や乳幼児の重症化リスク）を知っている」人は、約半数でした。予防法については、妊娠中のワクチン「アブリスボ*」が14.5%、抗体薬「バイフォータス**」は6.8%でした。

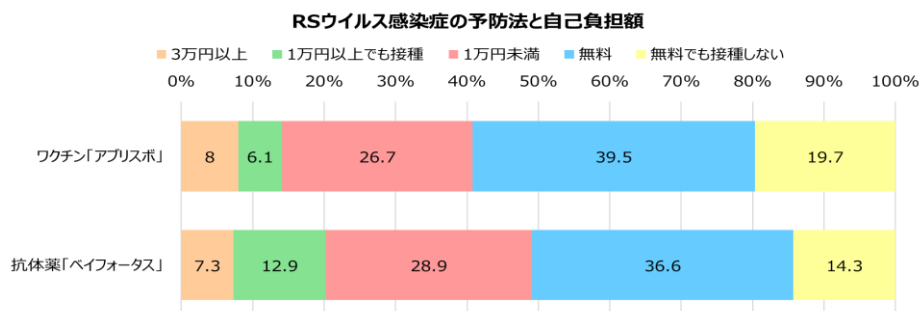


*「アブリスボ」：妊娠中に接種し妊婦が産生した抗体が胎盤を通じて胎児に移行することで出生後すぐから生後6か月頃までRSウイルス感染症の発症、重症化を予防する。

**「バイフォータス」：すべての乳児に投与でき、1回の接種で約6か月のRSウイルス感染症の発症、重症化を予防する。ただし、保険適用は早産児や基礎疾患のある乳幼児に限られ、保険適用外の場合高額な接種費用がかかる。予防薬には、流行期間中月1回投与する「シナジス」がある。

課題3 ◆ 接種の障壁となる費用の問題

「アブリスボ」「バイフォータス」のいずれも、「無料でも接種しない」人は2割未満です。これは、妊娠中のインフルエンザワクチンと同じ傾向です。また、4割程度が有料でも接種の意向を示す一方で、「無料なら接種する」との回答が4割程度ありました。



予防接種管理アプリに「バイフォータス」の接種管理機能を追加

当会が提供しているアプリ「予防接種スケジューラー」に、「バイフォータス」の管理機能を追加しました。「バイフォータス初回」は、早産児や基礎疾患（慢性肺疾患、先天性心疾患、免疫不全、ダウン症候群）があるお子さんのほか、すべての0歳児が受けられます。「バイフォータス2回目」は基礎疾患がある24か月齢以下の乳幼児が対象です。ワクチンの接種管理にご活用ください。

ウェブサイト「KNOW★VPD！」（<https://www.know-vpd.jp>）では、RSウイルス感染症とその予防法の情報を拡充する予定です。

すべての乳幼児をRSウイルス感染症から守るための環境づくり

RSウイルス感染症の予防を進めるには、すべての妊婦さんと新生児の保護者に情報を届けること、ワクチンや抗体薬の費用負担の軽減を図ることが不可欠です。また、母子免疫による感染予防（Maternal immunization）の考え方について国やアカデミアが見解を示し、周産期医療と小児医療が連携することが重要です。

